
かごのなかのおおかみ

北極星のなりそこない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かこのなかのおおかみ

【Nコード】

N8607H

【作者名】

北極星のなりそこない

【あらすじ】

籠の中の狼。籠の外の林檎姫。籠を壊す男の娘。籠を作り上げた
い女の子。籠に籠る女性。籠を否定する人でなし。一人の少年と五
人の女性。終わらない終わらない喜劇が回る。

登場人物一覧

朝霧 あさぎり
和丸 かずまる

この物語の主人公的存在。

石川 いしかわ
春子 はるこ

和丸を慕う眼帯少女。

泉立 せんりつ
秋水 しゅうすい

和丸と春子の後輩。

国府宮 こうのみや
蒲公英 たんぽぽ

秋水のいとこ。

空野 そらの
夜 よる

和丸の異母姉弟。

木野子 きのこ

菌類。

十年後

あれから十年。木野子が消えた、あの日から十年。

春子を殺しながら、秋水に殺されながらも、和丸は無事高校を卒業し、大学に進学し、就職する事が出来た。

日本を代表する大企業、の傘下であるそこその規模の中企業。仕事は適度に責任があつてそれなりに忙しくて充実感もある。同僚や上司ともうまくやっていけている。

順調な人生だった。ただ、和丸は――

「朝霧先輩。今上がりですか？」

「ああ」

今日の分の仕事を済ませ、一足先にオフィスを出ようとすると、高校からの後輩である秋水が話しかけてきた。「朝霧先輩を追つかけてみました」と大学も就職先も同じところを選んだ秋水。天才肌らしく、仕事の飲み込みは和丸よりも早い。後輩であるはずなのに地位は同程度、もうすぐ追い抜かされそうな勢いだ。

秋水は端整な顔を柔らかく笑みの形に変えた。

「何か約束でも？」

「黄色の奴がうるさいからな……」

「ああ……」

理由を言つと秋水は納得したようだった。「またか」というような、興味がありませんいそぶりを見せる。

「お前は黄色に会つてゐるのか？」

「たまには。あの子、よくトラブルを起こすから」

秋水は秋水で苦勞しているようだ。思わず共感し、苦笑してしまふ。

「ところで」

秋水は周りに人が少ない事を確認してから、すいっと和丸の耳元に口を近づけ、囁いた。

「ドルフィンピアスという物を試してみたいんですけど、先輩——」
「断る」

身体を離しながらはつきりと断った。

ドルフィンピアスというのはピアスの一種で、男性器につけるものを指す（正確にはさらに位置も関係してくるのだが）。いくら何でもそんなところにピアスをつけたくはない。

秋水は残念そうな顔をした。

「そうですか……残念です。僕としてもショックで先輩が不能になったらいやですし、無理強いはしません」

最初から提案してほしくないものだが、言っても仕方ない。秋水はこういう人間なのだ。

「ほら、さっさと戻れ。アキはまだ仕事があるんだろ？」

「あ、はい。それでは先輩、さようなら」

「おう」

秋水と別れてオフィスを後にする。駅前まで来ると、適当なタクシーを見つけて乗り込んだ。

「パブ『アルカサル』までお願いします」

行き先を口にするのと、タクシーの運転手は驚いたような顔をして、次にいやらしい笑みを浮かべた。

「お客さんも好きなんですか？」

こういう反応を見るのは一度や二度ではない。げんなりとしながらいつも通り答えた。

「いえ、知り合いが勤めてまして」

「へえ！ 誰ですか？ ヒナちゃん？ ミズキちゃん？」

「黄色です」

「へええ！ あの子と知り合いなんですか！」

大げさな反応もいつもの事だ。運転手の話に適当に相槌を打ちながら流れていく町並みを眺める。

十年経ったが、町並みは大きくは変わっていない。せいぜい幾つかの店舗が入れ替わったり、リニューアルオープンが何度か行われ

たりするぐらいだ。和丸が勤めている会社も十年以上前からずっとある。

人はそう変わったりはしない。劇的な出来事がなければいつまでも同じ状態のままを維持出来る。良くも悪くも、だが。

「つきましたよ」

料金を言おうとする運転手の手に一万円札を握らせる。

「お釣りはいいから」

それだけ言ってタクシーから降りた。タクシーの運転手も何も言わず、走り出す。どうせ黄色から貰った金だ、問題はない。あつちが勝手に「タクシー代+お店代」として十万ほど送ってきたのだ。知らずため息が漏れる。店に入る前に携帯電話の短縮を押した。数回のコールの後、プツツという音と共に相手が電話口に出た。

「もしもし、姉貴？」

『あ……和ちゃん？』

電話の相手は和丸の姉、夜^よだった。電話越しだが嬉しそうな雰囲気^{雰囲気}が伝わってくる。

「どう、そっちは。順調？」

『うん。あのね、コンビニのバイト始めてみたの。黄色ちゃんのお店はお金たくさん入るけど、でも怖いから……』

「そう。コンビニはどう？」

『楽しいよ。皆優しいし』

そこで一旦言葉が途切れた。無音がしばらく流れる。

「姉貴？」

『……でも……何だか、店長さんが怖くって……優しいんだけど、怖い』

心の中でため息をついた。聞こえるかもしれないから、実際にため息をついたりはいしない。

「何かあったらすぐ言えよ」

『うん。ありがとう、和ちゃん』

ほっとしたような声に頭を抱えなくなった。人は変わらない。夜

も変わらない。いつまでもいつまでも和丸に依存し続ける。和丸も、依存する姉を振り払う事が出来ない。

二言三言言葉を交わし、電話を切る。依存だと分かっている姉を放っておけない自分が嫌だった。

またため息が出た。改めてパブ「アルカサル」を見る。外装はシックなレンガ造りだが、派手なネオンの看板が雰囲気上台無しにしている。そうしなければその手の店だと分かりにくいからだろうか。店先でうだうだしていても仕方ない。もう一回ため息をついて扉を開けた。

「いらつしやいま……あ、貴方は！」

派手で薄い、露出度の高いドレスを着た受付嬢が和丸の顔を見て驚いた。そのままぱたと店の奥に入っていく。

「店長ー！ お客様きましたよー！」

数秒後、可愛いドレスを着た若い女性が店の奥から走ってきた。蒲公英だ。

「和丸お兄ちゃん！ 来てくれたんだね！」

抱きつくこうとする彼女をさくつと避ける。避けられて蒲公英は不満そうな顔をした。

「お兄ちゃん、何で避けるのぉ？」

「当たり前だろうが」

とりあえず頭をわしわしと撫でてやる。そうすれば蒲公英は嬉しそうな顔をした。

「黄色の飛びつきは痛いんだよ」

「えへへ、和丸お兄ちゃんへの愛だからっ」

蒲公英は結局あれから学校には通わず、こつこつとお金を貯めて自分の店を出した。この業界では有名らしく、ファンも多いと聞いている。経営も本人が行っているらしく、勉強なんてろくにしていはずだろくに、とそこは感心していた。

手を引かれる。店内奥に行けばあちこちから彼女を賞賛する声が聞こえた。それにひらひらと手を振りながら、VIPルームに和丸

を連れて行く。

柔らかい照明が数個あるだけの、少し薄暗い部屋。置いてある家具はどれも店内の物よりも一段上の物だ。ふかふかのソファに座ると、蒲公英は隣に座った。

「繁盛してるのか？」

「うん！　いつつもお客さん一杯だよ！」

先ほどの店内を見れば分かる。蒲公英以外を目当てにしている客も多いように見えた。警察の摘発、なんて不運な事がなければ問題なくこの状態を維持出来るだろう。

「お兄ちゃんは？　あの人にいじめられたりしてない？」

「ああ……まあな」

高校を卒業してからは割りと順調だ。蒲公英と世間話を交わしながら時間が過ぎるのを待つ。このまま世間話だけで終わればいい、と思ったその時、蒲公英の華奢な手が和丸のネクタイを掴んだ。

「ねえ、和丸お兄ちゃん……気持ちいい事、しょ？」

ああやつぱり、とまぶたを伏せる。

「十時までには家に着いてたいんだけど」

「うん、分かった」

ネクタイが解かれる。首に舌が這う。抵抗はしなかった。出来るはずもなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8607h/>

かごのなかのおおかみ

2010年10月14日16時54分発行